FINANCIAL FORUM

京都総研四季報

2018. SUMMER No.121

Special Interview

欧州、とくにフランスから見た現在の世界と日本

元NHK欧州総局長・パリ日本文化会館初代館長 **磯村 尚徳 氏に聞く**

京都総合経済研究所

放っておいたら自慢の桜並木が危ない！

――市民の保全活動が小中高の課外授業に

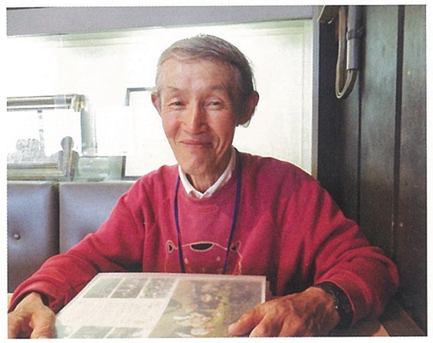
シニアライフアドバイザー　松本すみ子

東京の西に位置する国立（くにたち）市。駅から一橋大学の間を通って、まっすぐ南に2㎞ほど続く44m幅の「大学通り」は市民の誇りだ。両側には現在の天皇（平成）の誕生を祝って植樹された桜が170本ほど並び、春には爛漫の花で市民を楽しませる。その桜に異変が起きていることに気づいたのは大谷和彦さん。以来、「くにたち桜守」の代表として桜の保全活動を展開しながら、子供たちに自然の大切さを教えている。

桜の時期の大学通り

国立が好きになった！

外国から本を輸入する会社で働いていた大谷和彦さん（69歳）が自然保護ボランティアに初めて関わったのは、今から50年ほど前。野鳥や自然観察の講座を受講したら、代表者がいなくなってしまい、手伝ってほしいと頼まれたことだった。大谷さんは「そのボランティアがいまだに続いていて、どんどん増えているという状況です」と笑う。



くにたち桜守代表の大谷和彦さん

主に多摩地域で活動をしてきて、実は、桜よりも湧き水の保全や多摩川の清掃活動のほうが先だった。清掃活動には子供たちが毎回300～600人くらい集まる。野鳥と植物観察と水質検査にごみ拾い。それが終わったら、みんなで多摩川の土手でうどんを食べる。これが楽しい。うどんの費用は市民やロータリークラブからの支援だ。

多摩信用金庫の多摩ライフ倶楽部「歩いて多摩地域を知ろう」という企画にも、最初から関わっている。これは定年を迎えた多くの人が何をしたらいいかわからない、地域のことも知らないという状況への対策として始まったものだ。

なかでも、最も愛着のあるのが国立。再開発の前は三角屋根の風情ある駅舎が有名だった。駅前からのびた広い並木道。多摩川が近く、当時はまだレンゲの原っぱが残っていた。そして、あちこちで湧き出す水。「すごく、このまちが好きになっちゃった」のだ。

だから、国立の生き物図鑑を市民と共同で作るという市の企画には、真っ先に応募した。1年目に調査し、2年目に編集して出版するという。まじめで熱心な大谷さんは1年間で全種類の写真を撮りたいと張り切った。しかし、昆虫など生き物に詳しい参加者は少なく、同じような写真ばかり集まる。写真は増えても、使える資料は増えない。

これでは失敗すると考え、この活動に専念すると決めて、仕事を辞めてしまった。そして、せっせと写真を撮りため、翌年には編集から、カット、レイアウトまで手がけて、出版にこぎつけた。その図鑑は今でも販売されており、学校での授業にも使われている。

桜の木はつらいよ

「くにたち桜守」はそうした活動の中で、必然的に始まったといえる。ある日、国立の桜通りを歩いていた大谷さんは、ふと見上げた桜の木の皮がベロンと剥げていることに気づいた。よく見ると、あちこちに傷んだ木が見える。心配になり、市役所に行って、「桜の木が傷んでいるようなんですが、大丈夫ですか」と聞いた。

見るからに傷んでいる桜の木

すると、「知っています。でも、来年も問題なく咲くと思いますよ」という返事。今なら言い返せるが、そのときは知識がなく、返す言葉もなく帰ってきてしまった。それでも、心配は消えず、毎年開催されている桜祭り実行委員会に電話をしてみた。それがきっかけで、実行委員としての参加が決まった。

問題は、どうしたら多くの人に桜が傷んでいることを知ってもらえるかということ。考えた末、「国立桜物語」というシリーズ企画を立てた。1年目のテーマは「桜を植えた男たち」。大学通りの桜は昭和9年から10年にかけて、皇太子誕生を祝う市民が植えたもの。この歴史を知ることが一番と、その人たちから話を聞くことにした。とはいえ、植樹からすでに70年近く、亡くなってしまった人も多い。それでも、やっと探し出し、写真とコメントを展示することができた。もちろん、同時に「桜の木はつらいよ」と、傷んだ桜の木の写真も飾ることを忘れてはいなかった。

3年目はオリジナルポストカードを販売して薬を買い、桜祭りが終わった後、呼び掛けに応じた30人の人たちと傷んだ樹木の手入れをした。これが初めての保存作業だった。回を追うごとに参加者が増加。100人を超えるころには行政も動いてくれて、2年の期限つき事業ではあったが、協働活動「くにたち桜守」がスタートすることになった。桜の姿に心を痛めてから6年目、2000年のことだ。

定例活動は毎月第3日曜日。集まったメンバーで木の状態を調査し、弱っている木の周囲に有機肥料を撒き、傷んだ部分に薬を塗る。樹木板や看板の補修、根元が踏み固められないように進入禁止のロープを張ったりもする。見学も受け入れている。取材した日には幼稚園の園長が参加していた。「いつもはきれいだと見ているだけ。言われるまで樹木の傷みには気がつかなかった」との感想。こうして気づいてもらうことが保存の第一歩となる。

今でこそ桜の保全活動は全国的に行われているが、以前は、放っておいても春になれば桜は咲くものという程度の認識だった。「くにたち桜守」の活動は全国の桜保全の先駆けとなった。

治療中の桜の木

幹を叩いて状態を確認する

桜守定例会参加のメンバーと

子供たちが誇りを持てるまちに

くにたち桜守活動の素晴らしさは、市内の小中高に提案して実現した桜の課外授業だ。年間を通して、木槌で幹をたたいて音で状態を判断したり、桜の根元に植える菜の花のタネを採取したり、いい土のためにミミズが大事と知り、桜の苗木を植えて、堆肥も作るといった授業を行っている。今では12校、延べ3千人以上が参加している。大人だけでなく、子供たちが継続して樹木の保全に関わっている例は全国でも珍しい。

目的は、国立に誇りを持ってもらうこと。湧き水が校庭に流れている小学校は東京には2校しかない。子供たちは日常なので、その大切さに気づかないが、きちんと

子供たちと活動した場所に絵が

課外授業で下草取り

シニアライフアドバイザー
松本すみ子

㈲アリア代表、NPO法人シニアわーくすRyoma21理事長。シニアライフアドバイザー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。団塊・シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場分析などを行い、講演・執筆など多数。大人のためのインターネットラジオ『あすも』のMC。著書に『地域デビュー指南術～再び輝く団塊シニア』（東京法令出版）など。

知ることで、まちに誇りを持ち、環境のことも考えるようになってほしいのだ。

しかし、活動を続けるのは簡単ではない。市の支援は2年で終わった。準備には時間がかかるし、資金も必要だ。有難いことに、子供たちのためにと気持ちよく援助してくれる女性の経営者団体がある。肥料の資金が足りないときは、大谷さんが商店街を回り、2千円寄付してくださいとお願いする。「小学校の児童と桜の木を植えます」といえば、2万円は難しいが、2千円なら出しやすい。植えた後は写真を撮って、お礼の言葉を添えて報告する。なかなかの手腕だ。

桜の活動としては、立川の国営平和記念公園で開催している「桜コンシェルジュ」もある。桜で交流ができた小金井公園、上野公園、千代田区、墨田区、世田谷区、さらに茨城県日立市、北海道夕張市など、桜に関わっている人たちを紹介するイベントだ。2018年4月で11回目を数えた。

大谷さんは「桜が観光名所だから大事にしたいというのとは違います。いい町にしたいんです」と強調した。最後に、今年の桜並木もきれいだったでしょうねと問いかけると、「忙しくて、ゆっくり見る余裕がなかった」と照れたように答えた。花見は逃したとしても、樹木の変化は今後も見逃すことはないだろう。

ボランティアもつらいよ

課外授業時に、生徒からこんな質問を受けたという。「大谷さんは多摩川清掃活動や桜守とかやっているけど、生活はどうしているんですか」。大谷さんの答えはこうだ。「生きていくためにはお金が大事だが、1番ではない。お金はないけど、自慢できるくらいの友だちがいる。何のために生きるかだ」。

活動に参加した市民や商店街の人や子供たちから、たくさんの手紙が届く。嬉しいことに街を歩いていると、声をかけてくれる。大勢の子供たちを小学校時代から知っている。それが大谷さんの宝物であり、原動力だ。

とはいえ、やはりボランティアで生きるのは厳しい。大谷さんはカルチャーセンターの講師などで生計を立てているが、ボランティアが生活のかなりのウェイトを占めている。すべての学校に報酬があるとは限らないから、自前で活動費を出すことも多いらしい。万一、病気になったら、まずいなとも思っている。

そのためにも、有償ボランティアの仕組みを整えていこうとしている。お金のためだけではない。活動では準備や交渉にも多くの時間と手間がかかる。メンバーへの依頼がいつも無償では心苦しいのだ。仲間を引き入れるためにも、いい活動を継続していくためにも活動資金は不可欠。志だけでやっていけるものではない。

今、ボランティアは従来の無報酬・奉仕型から、有償ボランティアにシフトしつつある。無償ボランティアの場合は時間もお金も余裕のある人が善意で活動することが多い。その場合、受益者が不満に思っても、無償のために黙ってしまうこともある。

有償活動では、最低限の活動費（交通費、通信費、材料費など）確保に努め、余裕が生まれれば、活動した人に報酬も支払う。それなら、一部の篤志家だけでなく、幅広い人がボランティアに関心を持ってくれる。そして、意欲と能力のある人材が確保でき、満足感も高く質のいい活動を継続できるという考え方だ。

重要なのは自治体の支援だ。少子化と人口減をかかえ、職員も減少している今、多くの自治体が協働事業という形で、市民の力を活用する方法をとっている。ただし、市民は支援を望みつつも、干渉されない自由な活動を望む傾向にある。そうした市民感情を受け止め、行政の立場を説明しつつ、その力を最大に引き出す手腕が求められている。

多摩信用金庫のウインドウにはお母さんや子供たちと作った自然観察を展示してもらっている